李寧
註解 改正月令博物筌 十二月部 三

改
529
15

門 二 5
號 529
卷

十二月部目錄

△印ハ俳諧の季ノ部の印ハ季ノ詠ん

十月 卦 陰陽生 熟名和名並ニ 律呂

△小寒 三候

△大寒 三候 詩歌ニテ

△土牛童子の像を立る

日令

△乙子餅 月浸

△乙子明日 朔日

△忌日御飯

△臘日

△御國忌 三日

△臘八 八日 △臘八粥 △温糟粥

△御體御ト妻 十日

△事始 十三日

△神今食

△月次祭 十一日

△荷前使

△御髮上 中午

△寂勝寺灌頂 十五日

△被綿

△御佛名 十九日

△大德寺開山忌 二十二日

△柏梨勸盃

△魂祭 盆の魂祭

△小晦日

△生身魂 六ノ
△齋宮綸馬掛 六ノ
△大祓 六ノ
△陶見 六ノ
△年籠 十ノ
△大年 十ノ
△除日 十ノ
△追儺 十ノ
△豆打 十ノ
△柊挿 十ノ
△貘枕 十ノ
△吉田大祓 十ノ
△五條天神詣 十ノ
△大原雜喉寐 十ノ
△豐前幣川神事 八ノ
△御贖物 六ノ
△米洗 六ノ
△門松營 十ノ
△年守 十ノ
△大節季 十ノ
△分歲 十ノ
△節分 十ノ
△鰯挿 十ノ
△厄拂 十ノ
△厄塚建 十ノ
△寶船 十ノ

月令

△衣配 十ノ
△煤掃 十ノ
△札納 十ノ
△古暦 十ノ
△節季候 十ノ
△星佛賣 十ノ
△年木 十ノ
△年木樵 十ノ
△年取物 十ノ
△年の市 十ノ
△餅搗 十ノ
△寒聲 十ノ
△寒念佛 十ノ
△年内立春 十ノ
△歲暮 十ノ
△寒の入 十ノ

時令

△歲暮狀 十ノ

草木

△冬梅 十ノ

△早咲梅　△早梅　△寒梅　頁
△臘梅　頁
△寒竹子　頁

生類

△寒鯉取　頁
△雞乳　頁
△探梅　頁
△八目鰻取　頁
△鵲巣ごろ〻　頁

必用

此部ハ風雨の占破軍のひ〻方日〻よりの心得。衣服の正式。生花正式。天気と候等をのせ　十二ノ巻八十九ページ

他行の心得。旅行

養生

△屠蘇の方　頁

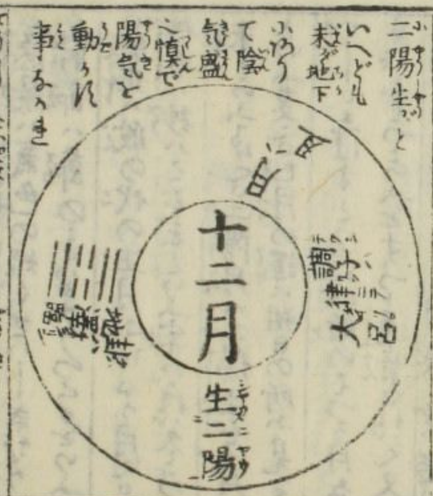
飲食

△鯛味噌　頁
△煮凝　頁
△凝豆腐　頁
△寒曝　頁
△寒の餅　頁
△寒造酒　頁
△菜喰　頁
△鹿賣　頁
料理献立　頁

十二月の部

△印ハ俳の季に用ひ来る物〻

二陽生ずといへども未だ地下ふくりて陰気盛んなるを慎で陽気を動かれ事なかるべき



調子ハ大呂と八大呂ハ陽氣出んと欲して陰これをゆるさじと出流傾

○卦ハ地澤臨と八水澤腹堅ゆる意にして陰さうんふ閉て陽氣泄る所ふ多しバ氣が和せざるゆへ地澤ふ臨んぐ水をとゞしむる意〻月令に出る

十二月異名

△臘月　唐書○嘉平月　史記○季冬　礼記○涂月　雨雅○窮節　顔延之詩
○急景　白氏文集△殷正　蔡安△暮冬　稽清△杪冬　唐詩△二陽月　事物異名

和名 三冬月 藏王 春待月 梅初月 同 年つき月 秘藏 年つき月 同 師走 こしよつむ月 莫傳 おやこ月 同 師走

○九月 莫傳 おやこ月 同 師走

○かきつの月 ○乙月 ○新月 此月 獵をして

異名註

○臘月とハ此月獵をして先祖を祭る由へ臘月といふ

獵の譯ハ廿丁目ふ出。嘉平月とハ秦の始皇臘の名をかえて嘉平こゝ

○季冬ハこゝ元の冬ことゝ義。○涂月ハ爾雅ふ十二月を涂ととゝ

○急景ハ氣色の短くせハーきなり

○窮節ハ節のきハまりつゝをいふ

○殷正ハ殷の代の正月ふいふ月。

杪冬ハ杪ハこゝをとゝ末なれば冬の末ことゝふ。○陽月ハ三陽生ずる月

とゝ支。○乙月の譯ハ朝日の所ふ見る

べ〳〵ふ生ずとゝふ四時のもつる月な

きハ生ずとゝをすつゝ通音なれば又

師走。師とハ僧。此月ハ古へ僧を迎て佛名

を唱ふ今の棚経ふ同じ 僧の走さゝめぐる

月名ハ前ふいへり 奥儀抄。真淵の説ふ年極とかきてとしこゝ月とゝ事ことゝ

冬 藏王 春待月

こゝまてゝ年ハ冬ふ春待月ふ

春待月ふいそ〳〵きうる

同 梅初月

梅ハ冬つほむ枝ことほのこえて

梅ふ月のこゝろいろえく

秘藏 年つむ月

月の上こ年ふ月むつ月いくかさ絲

うさゝもてもみ狩まいりきぬ

師走 業平

行とゝ師走の空ふ物ふくり

行れこゝるゝ物のこれこゝ

莫傳 暮古月

このこゝるれ今やけらんなふこかさ

これこの月のこゝろにぬつ

藏王 三冬月 定家

冬こゝる物ふとゝ見えこゝ三冬月

いそこゝふつゝ雪のゝ冬さ

莫傳　おやこ月

わを人のこたをはつる釈ゐ月
わやいのちのためーなるゝん

(俳)　ゐある師を尋ゐ草ゐ枝密柑　鶴谷
七猪の伸るに頃る時を弘　冠里
却寒九状とかゝけて師を弘　石貞

横笛を吹ゐ月のおもゐゝ　隠乙
扇打く後は師を巨燈の影　積雨

(狂)　正月の樂屋ゐ入ひくゝふぞ
守るも師を打ゐ家ゐ　家蔵

小寒

節の名〇七十二候〇草木七十二候〇昼夜長短〇日出入等左ゐ記ス

○雁北鄕ハ陽ゐ順ふて北ゐ歸ゐること月令
の註ゐあり○臘梅放ハ此頃咲ゐ臘梅の
譯ハ廿八すゐ委ーー○鶏始巣ハ鶏ハ木を
匝て鳥ゐ巣ゐ詩ゐも多く作ゐ
ゐ此頃の陽氣ゐ
發ゐ花ハ茶の花○雉始雊ハ月令の注ゐ雉
火畜ゐゐ陽氣に感て聲を出ゐこと有○水
泉動ハ水仙の花水を負ゐ立のひゐ事ゐ

大寒

中の名〇七十二候〇草木七十二候
○昼夜長短○日の出入等左ゐ記ス

○雞始乳と八月令の註ゐ雞ハ木ニ屬て
畜類ゐれハ陽氣こうきく後の形ゐて

いく事ことにより乳の字をつるひとよませたれば陽氣に催されてつるむ事をいふなり

○梔香綻とハくちなしの花のひらく事なり

○征鳥厲疾とハ鷹のこげーくなることいふ

○山茶灼とハつばきの咲ないとなり。水澤腹堅とハ水のあつ澤の氷が上下とも張つめる事〻。雪花出とハ雪の花ハ六ひらに降る事なり

○雪のもきうに降る事なり

大寒 天氣 東風吹バ晴天〻冬の土用寒さ厳しバ来生六月ひでり

大寒 土牛童子汁像を立。文武天皇の三年十二月ふ天下疫癘ふく死する者多ゝしゝバ禁中ふて土の牛をつくりく儺はらひをさせるつゝ。唐土にも土牛ハ像をつくりて国々の郡縣ふたてゝ寒氣をはらふすぐるひとをとる事なり

日令

此部ハ十二月一ケ月の日ハ定なる事支の定とする事を主るに

朔日 乙子朔日。物の始を甲といひ末をとゝ故終りの月の朔日ハ乙子といふなり

(俳) 月のつゝちなる名なり 凡東

乙子餅。弟子餅とも書く

○今日餅を賞ふ年の間無事にくらしー今日朔日の終りとなるゆゑ元日ふ餅をいそゝふ

ふゝ〻ひく今日も元日ふ餅をいそゝふ

○又一説ふ今日ハいとゝ唐土ハ臘日の祭の鯨風ともいふなり

(俳) 乙子膳ささ色う喰ふ 宗旨

川浸。川ゝ麻。今日の餅ハ食ふ時ハ水難をのがるゝ江戸ふ事ならいへども今日ハ川ゝ浸ふ深き譯ある事〻委しく書ル臘の祭論者

朔日 忌日御飯 季ハ六月と九月 三丁メふ委く記ル

二日 ○今日沐浴ハ火をさる

○京太泰佛名會今日ハ

三日 **御國忌** 今日八天智天皇御忌日なり。近江国崇福寺ハ昔ハ志賀寺とも寺ふ詠一ニ八雲御抄

中世三井寺に移しくるゆへ今ハ舊跡のみのこまろ天智天皇ハ聖天子

よく中興のあるゝ中興のあるゝ中興のあるゝ中興のあるゝ

御国忌といへハ此君の事なり

上卯日 大和 ○大神祭。卯辰の両日うり季ハ四月これ四ノ六ノ月ふ季ハ

子日 今日蓮又ハ豎の表を日にさゝせバ蚤虱を去る事妙なり

六日 不成就日 七日 必ずしもく所ふ遠く行ゆくべ遠せどと

辰日 **臘日** 季しき譯ハ廿三ノ項目

八日 **溫糟粥** 臘八粥。釈尊今日曉の明星を見て道成

ふ日ゝ故ふ本朝ふも京都天龍寺相国寺東福寺建仁寺萬寿寺右

臘八 唐土ふて今日を云ふ

五山ふて粥を製をとゝふ所製の粥ハ昆布串柳大豆粉薬菓を合ふ。○唐土ふも此日寺々ふくいろ〳〵の加菓を入て粥を煮て食ふ又檀家へ饋る之是を臘八粥とゝふ。道成乃ゝけ委しく博物筌ふの部ふ出ス

八日 今日竈の神を祭れバ大ふ幸ひあり祭神委しくハ歳時記ふ出ス

○唐土后陰子方とゝふ人臘乃日朝早く起く米炊きこれバかゝどの神ゝ〳〵ハまこく見へゝ子方是を拜しく辛ひを受く家ふ黄なる粥しを以て祀ればふゝ幸ひ大富を得ることゝ

八日 京都 ○智積院ふ論義ふ行くのゝ一山酒宴とかゝん

八日 **妙藥** ○今日の水を貯へ明年病ゝ〳〵ることゝ飲ハ能く万病を治ス。此水ふて丸藥ふ製方とる時ハ大ふ妙なり。今日

の水ゝ燈心を浸して明年火を
ともせバ蛾皆去る 廣義ゝ出さり

十日 御體御ト奏 季六月

十一日 月次祭 季六月

十一日 神今食 季六月 ○右御體御ト。月次祭。神今食ハ朝庭ゝ公事
ゝて六月十二月兩度行ハるゝ行ゝ所し
六月の條ゝ記ゝ侍る尚委くハ補遺ゝ出

十二日 山城 ○南禪寺大明国師忌日 ○妙心寺開山忌。博物筌ゝ委し

十三日 事始 ○正月事始。今日内裏ゝ
大臣以下正月の行司を
定む又天皇元日の御裝束等を辨
備ゝ。民家ゝも今日ゝり正月の
入用の品ゝ試ゝ。この〳〵用意をなゝと
煤拂おゝく八今日ゝなり

能 はゝ〳〵も又慶稀る事始 鷺水
事始ゝ物ゝ〳〵ゝ人ゝ犯 杉風

狂 のどゝゝる正月ゝ
せめ〳〵ゝ此の解ゝ
政長

十三日 荷前使 ○昔十陵八墓を定め
奉ゝひゝ〳〵ゝ荷前ハ初穂ゝ
よゝて神ゝ奉ゝるゝゝ義ゝ。十陵ゝ
いゝハ御代々天子の陵十ヶ所。八墓ゝ
いゝハ親王大臣方の墓八ヶ所なり此
事ハ崇神天皇ゝ起ゝ〳〵と四
季物語ゝ出ゝり尤勅使ハ吉日ゝ
撰ハるゝも今日ゝ定むるゝいゝり

能 内裏ハ電丸てゝ行ゝ 野史

十四日 不成就日 ○今日ゝり十六日まゝ
泉涌寺佛名會

十五日 ○今日沐浴ゝ身ゝ清ゝ
無病ゝて諸の災ゝ免ゝる

十五日 寂勝寺灌頂 今ハ名し舊跡
ハ岡崎ゝ移ゝ
灌頂の事ゝ〳〵ゝ俗佛事篇
ゝいゝる書ゝ面白ゝ〳〵

十六日 御髮上 截人御髮の梳ゝ
扇ゝ賜ゝ主殿宣

人松明を献じ奉る。上臈ハ
ぬけ〳〵る髪を箱に入置。此日やき
て灰を抽香を和し器に入まと
よき地にうつむ。一説下午ともいふ

十九日 御佛名。名だいめん。雲の上人名乗とるとも
いふ。僧を請じて三世の諸佛の
御名を唱ふるなり。三世乃佛は
御名をとなふまゝバ作る罪を
雪とこそもよ消るなり。哥ふも詠り

○禁裏にて十九日より廿一日まで
行はる。仁壽殿の御本尊を移し
て御帳の内にかけ。佛前に香花
庇に地獄の画の御屏風をたて男
女とも佛名を唱ふ。名だいめんとなふ事
八佛名終て殿上人各名を名乗をなふ

哥 三世の佛のは名をとなふるもいと
つゝもやこよひのこゝろ〳〵ん　俊頼

千首 あはれのかゝるまでにとゝめても
佛の名をだにのこるゝん　師兼

俳 風ふくに付て地獄も屏風い曽風

佛名やゝ宗員の附もこゝて　疎松

狂 地獄の絵名のてゝぐ〳〵佛名も
ゝさぬゝ名の極ふハゝ　來中

十九日 被綿。佛名の導師の僧に賜ふ
蔵人とゝく僧に肩ふゝる

哥 堀川次郎百首
かつけるわゝひきゝ付よ小おゝ付く
ひゝくゝ〳〵人せゝかゝして　俊頼

俳 寒風ふゝまこゝ直ゝつけ袋　蛙沓

十九日 柏梨勸盃。昔攝州柏梨と云
地を左近衛府よ
よせ、うゝをれよゝ此宣旨ふ其柏
梨より地の利分を以ゝ酒を造る
おゝゝ〳〵く佛名の夜み歌宴ゝとゝれ
をかやゝ〳〵の勸盃とハゝ〳〵り

廿日 山。嵯峨釈迦堂ゝ開帳
城本尊

廿一日 ○今日病人を見舞ゝ事ゝゝ
必ゝゝ。猥ゝ川端へ行ゝゝゝゝ

廿二日 不成 ○今日房事をつゝしめば就日三年の壽を延ぶといつて

廿二日 山城 大德寺開山忌 今宮の南紫野おゆり開山を大燈国師といふ延元二年十二月廿二日寂 秀井

(俳) 茶人ぢぬうりゆりけの大燈忌

廿三日 ○一遍上人の忌日 時宗の寺ふと不殘法事ゆり博物室ふ委しく

廿四日 照虚耗 ○今日妹のおとりれ灯を照せば貧さなく富貴さ

廿四日 灶神送 ○今晴の世ふ八今日灶神大ふ上つくろ日なり

くく家々灶神の札ふ供物をそ

禮拜一神を送ると云て其札を燒

けるとぞ又正月元朝ふ神を迎ふて

新ふ灶神の札を張りく物を備へ祭る

今日米の飯を碗ふ盛く

かまどふ供まバ家内安全

廿四日 占候 今日なきて来年の事をうらなふ

ありさて来年の事をうらなふ

うの供へる飯をうちはけて見るべ

碗ようるほひあるまバ来年よ記

ほどよ雨ふりくさりにさら

ど雪のたるふどぬまてあるを

来年大水出るゝ

外碗の底かと記くはるを来

年大ひでりなり

廿八日 ○鉢叩結願 極樂寺の本堂ふて

踊念佛はろう。結願とゝをうと云事ふ

廿九日 小晦日 明日を大晦日といふ

今日なき人の来る夜ふて

晦日 魂祭 今日なき人の来る夜ふて

なを祭をなを 觀恩經ニ出

音八今日も色ゝう七月の條ふ委し田舍

ふハ所ふよりうふ今も祭る俳ふハ暮の

魂祭とう又八冬ふ素物結びく季ふて

(俳) 魂ふとゝ八ふ素物結びく 立南

(哥) 夫木 なを人の来る夜ふて

彩ともむ宮ふ中ふの里 和泉式部

生身魂 両親又八親族の存生乃

人を別棚をこつらひ祭る

田舍ゑハ其風儀今ものこれるこ七月の條ゑ委〻 俳ゑハ夕ゑの景物と結びく季ととるべし

俳 こてもみ〻ゑ長燈てなれもの魂 乙州

晦日 京 ○祇園神前大般若經轉讀 都 同子刻ようけづかけ神事ゆう

晦日 豐前 和布刈神事 今夜丑の刻 社人帶劍ゼ鎌を持 松明をつけ海底ゑ入るとて潮水左右ゑ開き干ゑ出ずゆうかびし和布を一鎌川取〻 元日神前ゑ供ずるゑ

以ふ社ハ豐前企救郡集部村ふゆう故ゑ早鞆の社といふ昔此所長門国ゑ屬し神功皇后の時ゆう豐前の国ゑ屬し

俳 疱瘡さるゑ人の下や和布刈の夜 荷雪

ゑろ元と釈ハ和布刈の夜の事 衛守

狂 和布をかりて社ゑとつる大みこうなるけく者てゝ味ゆうゑのふ 雪峯

廿日 伊勢 齋宮繪馬掛 伊勢齋宮村の森ふ祠ゆう今小さゑ繪馬を掛るゑ其繪ハ稲と砂金袋の繪を書何ともゑれすかけおくゑ昔此所ゑ齋宮あり其時ハ今日大祓ありて繪馬を奉しゑ齋宮の儀式絶〻其例ゑ繪馬を掛るよやゑ又今夜繪馬を掛る事行疫神を宥ゆるゑさとのつゑ増山井ゑ出そう

俳 妙ゑの曲るゑ花ゑ掛ゑる姿ゑ 柳水

御贖物 公事根元ゑ六月ふ同じとあく生るゑ六月乃部ハ廿日ゑゆゑ註ゑハ四れかいうけゑ指〻く上ふもうたゑ紙ゑ穴をあけ御いきゑ入ゑゑ弘仁五年六月ゑう御藥の事ゑとてはしらて御贖物奉ゑ大ゆうゑ素盞嗚尊ゆう千坐置戸の祓ゑといふゆう起ゑぬゑ事ゑうゑ。按ゑるゑ根源の説おゑつゆ〻ゑとゑきのとのちくうおきとゆうおゑるゑうはゑれ其罪を贖ふ。かのゑ〻ひの義ゑ天子乃

息を入らるゝハ御罪をゆるさるゝし
て卅日の稜ゆゑ〜ハせらるゝ御うる
代のゆゑなるゝ〜ゆゑ〜ゆゑ〜されば
両月とも卅日は〜ひの御ゆえ
なるべし

(俳)一息の五煙草やゆゑ代の春 荷風

卅日 **大祓** (俳)天祓ひ〜けハ六月の條に委し

米洗 卅日ふかぐ〜ゆゑ餅米を洗ふもの
一説に九日ふかゆゑ長閑に樂んぐ
為米ゆゑ卅日に洗ひ時に置ともいふ

(俳)米ゆゑひおとて鶯くおうよ 管月

卅日 **岡見** 今夜子の刻高き所にのぼり
に東の方を見て朦々たる霧
の如きハ明年凶又明らかなる時は明
年吉。又今夜高き岡に登て簑を逆
さまに着て遥に我家をみれば明年
わるべき吉凶見へると 温故日錄に出

(哥)夏とゝもあれおほつちやさて居見さる
ことをえさ〜ゆゑとゝ就とうる 俊頼

(俳)陣田田を表するほかるゆゑ人心
打卅の出をもえる岡ゆゑ 夏牛

卅日 **門松營** 門松立る(俳)門打と受
ともやゆけおうう 梅指

(哥)夫木 山の門の外もつゆもえこゝう
ゆ年の祝ゆゑ来を忘へる 堀川
堀百 門松をゆゑるゆゑ門の松に
来ゆゑ〜ふ初ハやゆゑめ〜ん 顕季

年籠 伊勢大神宮ふ此夜こゝう
こもて元朝神拝をみん

○一説に伊勢大神宮へこもるばらう
ふくくもあ〜ぐゝうふや

(哥)夫木 老らくのかくまんこゝ三のゝ
と〜こゝう三ゝ元ゝもゝよ 信實
此哥の心ゆゑハ守歳と同一意なり

(俳)年こもり留るとつゝ淋しさん 芦帆

卅日 **年守** ○守歳 今夜い徹夜にて
春をむかるゝ〜東夜〜〜

卅日 **大年** 大晦日。年のゝてゆゑ大
の字とゝゆゑるべ

廿日 **大節季** △掛取 俳 掛乞 乞涼
△掛取ハ雑ともいフ。大年大晦日大拂
のことけ委しく日本歳時記拾遺に
出ス。此書ハ字義を正し諸書の
故事を引き面白く論あり見るべし

廿日 **除日** △除夜 △除夕。除ハのごく
とよむ字なり。今年ばかりのぞ
きさるとく来年よりまたるを〜
○除日詩哥左に記す尚歳暮の條見ベシ

伏見院

哥 御集
ことしもいまのこゝろハのこりけり
たらいとくなる春ぞうれしき

源重之

拾遺集
いとさつるおのゝこゑしとハいさてねしかく
はるゝとハいなとやさらうゝまさ

詞 ゝのこと書り。ゝのこの書ハ。ことし
くる行の一夜なり。やとことにかやら
。年ぞくれる。たまおろる。年のとり
。年もいぬうゝ。年ハ一夜

連 ぬハなとおもひなさ年の暮 紹巴

俳 除ゝて年ぬ紙人老の坂 支考
猶ゝの一夜あちゝゝゝ花の春 分
引ハ方ゝ表とゝゝゝ大三十日 竹川

天三十日 除ゝにゝよハぬ杉の苔 湖春
ゝゝくと大年の市ハ故の春 牛窓

天廿日 やゝて底ぬけゝの川 連孤
二ゝゝゝ大晦日にてもまひ 紅素

狂 さゝめ世の中ゝ世ゝ
いゝゝちゝとのゝゝ 貞左

廿日故事 **分歳** 。唐土ニハ大年ノ夜先祖ヲ祭テ家内打ヨリ酒宴ヲナシ金銀錢ナドヲ家族奴婢等ニ贈ルヲ云トソ

萬年糧 唐土ニハ廿日ノ夜米洗ヒ籠ニツミ米ト飯ヲ盛リテ上ニ松柏ヲサシ・蜜柑等ヲ置テ日ヨリ三日マデ餉ヒ今ノ蓬萊ハ此余風ナリ

燒燈 此夜院々ニ燈ヲ燒ク如白日トイヘリ

設火山 階帝除夜毎ニ殿前諸院火ヲタク事山ノゴトシ又コレニ沈香ヲタキテ火光暗時甲煎ヲ以テ〻〻ク香數十里ニ及ブ一夜ノ間沈香二百余秉ヲ用ヒ甲煎二百石ニ過タリ隋書ニ出

醉司命 都人除夜ニ至テ僧ヲ請ト看經シ酒菓ヲ備テ神ヲ送ル合家簪ヲ燒テ紙錢ニ代ヘ竈馬ヲカヽドノ上ニハリ酒ノ糟ヲ以テ竈ノ門ヲ塗ルナリ是ヲ醉司命トイフ事文類聚ニ出

詩 除夜 吳鷗

老稚均欣載安 モヒトツニコトシ
一年安ラカニ暮シタコトヲヨロコブ
低吟淺酌共盤桓 ハテウタヲウタヒヨイホド酒ヲ
ノシテミナクユルリトシテヰル
瓦瓶春透屠蘇暖 ヤキモノトクリニハヤ春ノ氣ガトヲウタカシテトソノ
酒ニアタヽリガクル
石鼎香銷柏子寒 ヨガフケレバ

石ノカナヘニタイタ香ガキエテ寒クナル 無限世紛多鞅掌 イロ〳〵ノ世間ノ用事テ
一世話カ多ケレド 那知天運又更端 トキノ〻ハリアハセハシレヌ
ニ〻タ一年アラタ〻ル 迎新送故須臾事 トタラシイ春
トシヲ送ルモワカ〻ノ間ノコトジヤ 不倦挑灯坐夜闌 タイクツセズニトモシビヲカキ
タテ夜ノアケルマデスハツテヰル

詩 除夜五字對句 同上

夜將寒色去 今宵光景舊
燈向曉光新 來日歲時新

詩 除夜七字對句 詩楚

晚景莫追愁外驥 一夜去
春風不染鏡中絲 五更來

トモシビモ一カツキノヒカリニ向フテ新ウチんヤウチ
アスハトシモトキモアタラシウナル
コトシノクレノケシキハードタトノヒカゲヲオフコトヨスナ
アスハルカゼハガ〻ニウルシラガヲソタテモクレ〻イケレド
ヨアケニハ春ガクル

節分 追儺 鬼やらひ なやらひ 追ふもい 昔八卅日の夜なり今八節分ニ行ハる。疾鬼と追ふらん。疾鬼とハ邪氣を指ていふ。

ゑう陰邪の氣人を傷ふものを追ふ。ちふ為の義。其鬼と名づくる者ハ熊の皮を冠り鬼の面を着て黒き衣に赤き裳をつけ斧をとり桃を持て禁裏の四門ニ立其時陰陽寮祭文を上郷已下桃の弓蓬の矢をもつて

これを追ひ射る世間問答ニ出ス

○打やらふといふ事ハ源氏物語ニ出て儺やらふとハ追ふと云義ニそ

前人納言隆季

寄 夜水

九月ニのゆきのうへにやらふやらふ乃おとゝよりもまさりつゝ

貫之

家集

鬼ゝ〳〵も数のうちにこそ入めきゝ〳〵やこゝろ〳〵ひとゝあらん

俳 鬼やらひ記つゝ寄すゝ拾ふ 持丹

鬼やらふや逐ハ実ふゝ〳〵なり 寒林

追儺の板鬼の女房ハ添乳ゝ 孟弓

鬼すゝひ公ふの氏姿の似合しき 榮姿

狂 逐ふ〳〵鬼の目ゐも比ッのめ

めでゝ〳〵はらふ心こゝ〳〵けき御代 信舊

詩 宮詞 王建

金吾除夜追儺名畫袴朱衣

四隊行 金吾ハ鬼やらこ勤メルモノ、宣名ナリモ袴ニカキ衣ヲキテ四ナラビニナリテ鬼やらヒヨツトムルナリ 院々燒燈如白日沈香

火底坐吹笙 役所ゝ二ハ火ヲタキ燈ヲ又禁宿ノオモムキハ、アカナルモノ、ニテ其中ニ樂テリ沉香ヲタクハ階帝ノトキノ故事ナリ

節分 按どうに節分の夜ことる儀式鬼やらひ。はやし豆。

ひいらき。宝舟。厄拂の事 ゝ〳〵昔ハ晦日ゝ〳〵有ゝれ共も晦日の夜ハ素内

年のよふけふ事ゝ〳〵げきゝ中世ゝ

右等の事を節分の夜ことゝ

尚委ゝ記てけハ年中風俗考ふ出

なり面白記事ゝ見ゝべ——

豆打

△爆豆△撒豆△福ハ内△鬼ハ外。禁中にも熬豆を撒しく疫鬼をはらハせらるゝ事宇多天皇の御時より始る民家にも豆をうちて福ハ内鬼ハ外と難をなす豆をうつ役ハその来る年の支に當る者つとむ是を年男といふ又豆を打事ハ魔目打といふ義也 風俗考に出

○唐土にも今夜赤丸と五穀とまく事後漢書の註に出たり赤丸とハなつめの事也

㊖らきと鬼にいはへいらぬ豆　其角

入聟や口の内ての鬼ハ外　了雨

鬼子逢ふさ肉のあつき鬼ハ外　来山

柊挿

△柊賣。冬も青翠にして貞を守るれ操ありと本艸時珍の説あり

○世俗に門戸にさして目つき鼻つきとて同じく鬼を追ふ又神代巻にひゝらきれ柊のさとゆりとの縁によるや

鰯挿

△鰯の頭さし。井クシサス△なよしの頭さし。いさしのかしらハ疾鬼邪鬼のきらふもの也へ今日さしおくべし○土佐日記節分の條に曰なよしのかしらひゝらきなど小家の門にさしたといふ事ありなよしハ鰡の古名と思はる然れども勢州にてハ鯔乃魚をなよしといひ名吉とも呼いづれ是なる事をしらず

○井クシサスとハ節分の夜鰯の頭を門にさしたそのよ　呉竹集に出

㊙世の中ハ数ならずともひゝらぎの色に出てもいはじとぞ思ふ　為家

㊖鰯の諸の文字を宗やお柴　松稚

柊ばさすふ削る薬師の書　也鳳

㊗柊さし豆てもあれかくれうきわかう下にハいらぬまめをよ　貞左

貘枕

△貘の札。白澤といふ獣乃事なと白樂天ハいつの節分

の夜貘の図を畫く枕とすれハ
悪夢を見ず諸の邪鬼を避る事
妙なり俗ハ貘ハ夢を喰ふ獸といふも
いとゝ信ずる依之左ふ貘の正像を出し

○唐白樂天貘屏讃曰

寢其皮辟瘟
圖其形辟邪
今謂之白澤

○五法水あて寫したる此御像を家ふ
所持とれバ時疫や病うつらず。獄
狸悪氣其外諸の怪異その災
をなす事なし万一怪しき事ある
ゝ又ハ怪しき病人あらバ此白澤
の像の前ゝ〳〵呪文を唱ふまゝ
きいげん神の如し近世ハ大坂吉文
字屋市左衛門といへる本屋ゆて五法水
ゝ〳〵写しなる此白澤の像を賣るゆ世
間ふつる守札と違ひ渉世錄其外諸書

ゆ出ゝ正〳〵き事なり余も此像
を家にうけて凶事の吉事となり
なる事多し依之諸人の為てに記し

俳もしもゆ兒ゆ〳〵ふ貘枕 蓼国

狂とても今ゝ世の夏を貘よゝ
ゆ十年でもゆんゝ 湖月

厄拂

〈厄落〉節分の夜民家の
門を厄拂ひゆ〳〵とゝ
て乞人ゝ通ゝる〳〵其者ゝ少しゝ銭を
与ゝまゝバ俗ゝる祝詞をとゝなへゝる京
大坂ゆ〳〵專らゆゝる事ゝ田舍ゆもゆゝ
国ゆゝて今ゝ毎家に社人来ゝて祓
をとゝる所もゆゝ是ハ禁中ふ此日ふ行ハ
るゝ大祓の余風ゝるべし。厄拂の事哥
にゝて〳〵の沖ゝ〳〵ゝとゝて〳〵ハ素盞烏
尊ゝ千ゝ〳〵ゝ置所ふ物をにゝて拂ゝし
ゆ〳〵其千ゝ〳〵置所ゝ直所ゝゝて沖ゝゝる
べゝ〳〵の祇園けゝゝゝけの夜ふも身の厄ゝ
拂ハ今ゝ為何ゝるものゝても我身ふ添ひ
なる物をゝもゝて道ふ落〳〵歸ゝゝとのゝゝハ

せも同じ心ニ〇人々厄年迎慎む謹み〻び
ふ厄のとけ委〻しく 日本歳時記 歳時記拾遺ふ出

(俳)性ある信今人〻うり厄はらひ 貝雌
ゆ〻まるれや進拂まし〻 厄拂 恕由

(狂)せをとうとうとてはうる〻事と
やくくもたくみやくを拂へ〻 駄足

京都 **吉田大祓** 節分の夜ト部家吉田の齋場内陣わく
祓を修行を式ハ正月十九日清祓と同
じ〇又節分の朝ト部家宗源殿ふて
神道護摩を修ス疫神齋礼三
千枚を出し諸人受く門戸ふ貼る

厄塚建 節分の夜吉田神祇宮ふ
を築〻く祭文をよむ是を厄塚建
るといく正月十九日ニ此塚を取拂一
といつり正月の條ニ見るべし

(俳)厄塚も空うなく拂ふよ 桐右宮

京都 **五條天神詣** 勝の餅 白求賣
〇節分の日ハ禁重〻

白求小餅 實船を上る〻節分ハ夜
諸人参詣して右三つの物とうる
白求ハ家ニ歸て焼〻白求を焼ハ
邪氣百鬼を辟るといつり小餅白求
ハ舊例ふよく人〻うり是を賣む
近世其料物を社司ニまうて製せむ
〇小餅を勝の餅と書くハ小と勝と同
音也ハるべし一説ふ此餅ハ社地の内勝
軍地藏尊ニ供る餅也〻〻祭神委〻九月十日ニ也

(俳)ふ〻のせて〻〻く小彦名ふ勝の風 中戸

寶船 紙ニ宝舟を繪と書て節分
〇或人の〻〻く寝ハいねと我を稲と
て舟ニ積〻ふ心ふるべし 除夜明方
い人のやどろむ枕いねつむ〻ふ同ト

(俳)ふ抜ていぬきて〻ふ宝舟 春月
宝ニ〻〻〻〻〻〻〻ふ酒の酔 厚子平
枕妻と二人ふ床やなる〻〻〻 半窓

(狂)な〻〻ふ祭ふこれもよ〻れ〻も
おもふ見の福の神ふ平 捨吉

節分

大原雑喉寝

○山城国大原江文明神の祠へ
里は男女泰詣通夜して夫婦乃
かゝゝひまをいとゝ。山州名勝志
曰昔蛇井出村の大淵といふ池ハ大
蛇住む時〳〵里ハ出る人とゝ
んとを西へと蛇出るとゝ見て男女
一所ゝ行けうと臥てゝ
これを大原ざこ縁といふこの事
ようおぼえ〳〵其後ハ節分乃
夜産沙神の拝殿に一通夜をする
とゝ

(俳)せをそ心の臭こ旬利のさこねい鬼貫
承様姫なる元旨もむる雑俳寿ゝ文人

(狂)よい縄のゝ〳〵るゝ〳〵ぬもいゝ
ふくうさゝ孫ゝ大家のゝ川 遊糸

月令

此部ハ十二月一ケ月の
日の定ゝ行事を記し

煤掃

○ゝはきゝくゝ
ゝゝひを歳暮の祝と
せゝ事八百姓ハ春ハたがやゝ夏
くさきゝ秋収む冬のゝ其暇ハ
得〳〵一年ゝつて春を迎ゝるゝ煤をゝゝひ
せゝゝ又内裏の煤ゝゝしゝゝハ湯殿
院の御時とゝ人此事ゝ公事ゝ
あゝゝ源氏物語ゝ○家ゝ煤の疑ゝ
繁昌とゝ神代巻大己貴命國譲
文中ゝゝ○唐土ゝも掃壁ゝ
此月ゝゝゝひをゝとゝ見へゝ

(哥)かゝらきゝ外ゝのゝとゝのゝゝ
ゝゝゝゝものゝもはゝゝゝ 經行

(俳)ゝゝゝゝ何ゝゝも捨られん 文考
ゝはきゝゝゝて仕舞ゝ 全

(狂)ゝゝゝも除巾て出ゝすゝ
ゝゝゝの打もかゝりかゝゝ 樂水

衣配

○源氏ゝ○ゝ扎巻ゝ衣ゝ
の事ゝ其文ゝ書ゝゝ
きハ年れゝれゝ人々の装束ゝ
おゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ぐさるきぬを御覧じてつと多かりける物なかりしかくふ根なれどもれくるべき事とて御衣櫃箱どもふ入させ給ひてこれはかたへとくとじて入ると有これくふ衣をくばりあたへる八源氏の江ぶ人たちへの書させあり民間にも親属奴婢などふあたへゆかしきさせ豪物などともとらきぬくばるなり

(俳)いろくふくは年のくれとて園女
衣くばり下司かとすまくふなり 大立

(狂)とれくふむ配てのきぬくばり
一ごもれなり行きま男まきなり 松花

札納

門戸ふはりたる寺社の札とりおさむるなり

古暦

△暦の表△巻はつる暦△春納
暦△右ふ巻暦

(哥)新六帖 二とせの暦れおくふ色よ色くのころ日数のかぞもとくふ花 知家

(俳)ふくろしき日も廿八日を古暦 良道
妻のくれ暦のまれ二三寸 追風

(狂)暦ては𛂦もせねとりく川のあの年ふ八月もやらられ 流霞

節季候

△嫁等。乞食がかられ裏白をさしそさて家くふ来りく節季はなひくと呼かりて米を乞ふなひくふなひくと乞食の言なるべし昔ハ赤き繊ふて頭面を包つこ烏帽子を着ちとへ○婢等ハ乞食の妻などと同じく白毛綿ふ顔をつつみ赤前垂をして自姿等といつて米銭を乞ふ此その京師よの出る

(俳)いの俳くぎれ季ととそぬ寒の馬尉
志るよいとお月々て来る声は蜂居

(狂)敷たくて世ふ八坂のせきふかて過つや志ゆれいらへとゆかり 貞柳

星佛賣

年初ふ八其年の属星を禁中ふて祭りあひ御修法ある也正月十三日佛師来年属星七曜の像を造て禁裏へ奉る民間ふも此なび

さるゆゑ來年の屬星を披行して貴物皆
○屬星といふハ九曜星を人の五性に配し
て毎年の屬星とするなり○九曜といふハ
日月木火土金水羅計都合九星也

△**年木**　△年木樵の内裏へ薪を上るハ
御竈木とて早春これをなせし
かつまおきてかざり木などに稱し其木
をきる者を年木樵といふなり

(哥) 夫木　後九条内大臣
ふるしはの杣山川のいくさ二乃
いそくとし木をはこぶやるらん

(俳) 花のはく木も樵る兄の雪ぶり　雪紅

(狂) 花も実もなきふるまきて枝のこを
きのうし木といつべかりける　祐喜

△**年取物**　正月に用ゆるかざり米年
木其外來春用ゆる物を
年内にとり貯るをいふ

(俳) 九條殿の書賦いふ[illegible]　詩六

△**年の市**　正月の儀式に用ゆる物を
賣る市をいふ　△毬打賣

△ぶりぶり賣　△まごいろ賣　△神の折敷
數賣　△かやうちぐり賣　△楪賣　△こうじ
賣　△穂長賣　△串竹らつて　△餅松賣
△かきうら藁賣　△神の皿賣

(哥) 市に出くさまさまにむらこゆるぬの
いそくハはるのいそぎなるらん　久定

(狂) 年の市歩きれいはまけるぬすびとれ
いつてうへのらしれ市とは　子海

△**餅搗**　△餅花　△餅むしろ　△賃搗
△青むしろ　○長寿れ　粧餅

○正月祝ふ餅を年内つきて新しき
筵に載れくなり○餅花といふハ小さき
餅を柳の枝に數多つけてもあるの
かざりになん○賃搗といふハ繁華
の市中にハ釜竈杵臼など持て人の家
に來り一臼搗賃何ほどと賃を取て
搗といふ三四十年前よりおこなはる
○粧餅といふハ肥前の長崎にて年の
くれの餅搗にハ終りの一臼を桂へ春付
置正月十五日東土の火にて焙て食ふぞ

(俳)勝つつと音と長よ鈴しけ 文考
勝つきよ我ちられ下女ちかふ 来川

(狂)湯気のこれ雪の中ちる降つきよ
いつきそもちゝめ雪も咲ちり 貞柳

年忘

年の暮ニ親類朋友互ニ酒宴をなしたるを云ふ 唐土ふも
此事あり名づけ〻〻澱散又ハ別歳
とい〻〻東坡集ニも出たり

(俳)人ふ家と雪せ〻我ちと芭蕉
煎好ハ死ねとの〻れ年忘 文考

(狂)年忘ひつひちして〻〻言のまやけ
四つひ出して〻〻ちの森 甘露

寒聲

△寒声つゝふ△寒弾○詩端
奇かと調ふ者寒風ふ向
〻〻修行と○三線 おと聲立する
者寒中に外ふ〻修行と

(俳)寒ちあ中我ひ逃る二三遍 天夢
寒ちあ中ちと遠ちふ及氏

寒垢離

修験者の類寒中に
水を浴び身をらし

て神ニ祈るこれ火伏ふ〻〻ひい〻
家々ふ水を浴させ〻〻錢を與る
もちろう又信心の人ニ立願して
行ふ〻〻浴るもちろう

(俳)寒ちあ中ちと浴せて抜ふ徳夫
寒ちあ中ふ被て寒る麻もえ 羅人

寒念佛

微ことふ同ト〻夜々修
行ことふ七墓三昧やどもふ巡ふ〻〻
(俳)あの寒れ撞木ハ細しを会ふ 文考

臘

△臘日○腊臘△基平 清祀
○唐ニ三ハ四時獣狩ふ十二月
の狩を臘といふ臘ハ獵と一義ふて
獵して獸を捕て先祖を祭又百神
を祭ることをつかり○冬至の後第三月
戌日為臘百神を祭る漢の世ハ戌
日を以〻ことニ魏ニハ辰日を用ひ晉ふ
ハ丑日を用ひ説文ニ出今ハ大寒ふ近
き辰日を用ひ○此祭ハ夏の世ニ
ハ嘉平といひ殷の世ニハ清祀と

いへ周ふハ大蜡この人漢ニハ臘この人
なり 風俗通の禮傳ニ出○臘ハ先祖と
祭らし蜡ハ百神を祭るなりと同日に
して祭異ニ主燭寶ニ出○按ずるふ社
日の祭れ類ニて社日の祭ハ民の行ふ
所臘ハ上一人より下万民ニ至るまで
先祖をまつりて又諸の神を祭り互に
酒宴をなし祝ふ事本朝の祭れ
如くなるべし

○本朝わく十二月朔日ふ祝いて喰
ふ餅を川ひくろ餅とくふ此余風
なるべし季冬ハ水の終てなり辰
の日ハ土れ位ニ水土を祭るゲ故ふ川
ひくろとのたも據あり と風俗考ふ出

○哥ふ冬の狩こ八是なり古の習俗
ハ皆もろこしをまねる事ニたるべし

詩 臘日常年煖尚遥 臘日ハイツ年モ暖カノ
催スコトハダッタ 今年臘日凍全消
ミナノコトジヤワ
臘日ニハ氷モノ 侵凌雪色還萱草
コラズキエタ

雪ヲシノイデ萱艸モハエ 漏泄春光有柳條 春
ミキヲナラト見セバハヤ
ヤサキノエダシヤ
醉 まモノサニ酒ヲ 縱酒欲謀良夜 酒ノニテオモシロイヲタノシマテ・オモフ
酒ヨヒノエヒヲタノシマテ・オモフ 還家
初散紫宸朝 朝庭カラ家ヘトツ
アシンデニノ礼義ヲ
クツロ・ロ脂面藥隨恩澤 ロニウケ
イダ・面ニツ
ケルクスリナドヲ拜領 面ニ
スルミナ君ノオメグミニヤ
九霄 アヲイフエヤシロカネノサカヅキモ
・三ナ拜領モノジヤニヨツテソラカラ
アマクダツタモノ
ノヤウニオモフ

詩 五字對句 同上

宴禮非迎氣 獵獸逢良日
今日ノ酒宴ノ礼義モ ヒトツタリニ出トツタケダモノ
陽気ヲ迎ルデハナケレト ハヨキ日ニアフタノニヤ
司神為報功 吹面屬令辰
冬ヲ司ルカミガ功フエラキウタウタフノニヨ
ミセナサルニソシヤ キロニヨツテジヤ

臘日故事

勞農 漢書李冬ノ月農ノ
百姓ナドヲ子キラと

酒サカナ等ヲ賜フテ天皇職アリテ天地人ヲ祭ルノ意ナリ

時令

此部ハ十二月一ケ月ノ時候ヲかゝるあらえと記ス

寒 一寒の入こ寒の入こふなどいきと寒と氣ゝるあらくば

(哥) 肌さゝるかぜもいふさむく苦しめとひとゝふひもとかゝくらん（々ゝ） 舎人

(俳) から鮭も空也の痩も寒中 芭蕉

寒く思ふしハとゝ寒のくち 吐雲

(狂) えぐがとく魔がきたれ寒ければ木端

(詩) 寒夜 宋張耒

寒夜客來茶當酒 客ガ来タレバ茶ヲワカシテ酒ノカハリニスル

竹爐湯沸火初紅 竹ノフチデカケタ炉ノ湯ガワキ

寂寞一燈人不寐 一ツモナシヤウナ

窻前月有纔梅花便不同 スコシ梅ガ咲テアルトチガフテオモシロイ

(詩) 寒五字對句 同上

急景流如箭 短イ日カゲノ行コト矢ヤウニハヤイ

童子愁氷硯 コトモハスヾリノコホリタノニコマル

凄風利似刀 寒イ風ガキビシクアタルモノスゴイ風ガキビシクアタルニタトツテカ

佳人苦膠盃 ツヤ〻シイ女ハ林ノイテツイタノヨイ

(詩) 寒七字對句 詩題

苦寒氷合分流水 サムサヨキラクビブンハホウ〻ヘ分レテ流ル水モ一ツニホリ合フ

衣狐裘 キツネノカハゴロモヲキル

欲雪雲垂四面山 ユキガフリソフデ雲ガ四方ノ山ニオホヒカヽル

紙窻寒 カミデハツレドガサムイ

寒之故事

肉陣

鄭居セレメテ寒ヲフセグ場家

申王嚴寒ノ時ハ炭

妾ノ肥大ナルモノヲエラヒテ行

女ヲ坐ノ側ニ一ツメ

列セレムコレヲ遮風肉陣

イフ 開天遺事ニ出タリ

鶴語 晉ノ太康三年冬寒甚シ南州ノ人二ツノ鶴ヲ見ル鶴語テ曰今年ノ寒気ハ堯帝ノ崩ゼシ年ノ寒ニ劣ラス書書ニ出

(狀) 寒氣見舞文

時維栗冽寒威侵人未審動止佳勝不佞庸劣依舊無煩軫念聊裁寸楮奉候

(同) 書晷之文

天寒氣縮○烈寒凛々○洞陰奇寒冒骨毛○履冱清福○眠食清安○鰥生○小子○吾儕○陋生

久不聆清誨義可奉問友賜高教慰問恩甚之奚枯深感至情伏審雅履万福寒甚自玉是祈

年内立春

△冬の春△年の内は春○委しくは正月九十七に記

除日立春

十二月晦日を除日と云ふ俳諧は十二月の季

(季) 家集 彩年の春は遠く吹きつけてあふやうらんぞのえの風

(連) 元と紀春や一夜の初かすみ 昌叱

(俳) 春の来るは遠くなれば遠くなる 季吟

(狂) 月日はめぐるも立もえ春の のつらさうらめ春はやうりや 常憑竜

歳暮

△年仕舞○哥の詞に用ゆるものハ次の條

よゝ印を主る。十二月廿日頃よゝ
で世日ものぞを歳暮といふ。歳暮
の賀といひひろく親類朋友互に物
を送りて合ふ。無事の終年を
よろこびくるう唐土にも此事は
なし東坡が詩よも見へず。年の末
を歳暮又八年の尾などいふる深き
譯なり。歳時記拾遺に委しく面白きなり

哥　万葉　三月ちかくなれば花の
の花ちらしはべり人もなし
古今　雪ふりて年の暮ぬる時に
こそ春立てまちつけ人もあれ
後撰　せれて世をとなるふちに
なりにしをさりくまをかりる
拾遺　ゆきつもるおのゝ年をふる
しくををとめとぞとられき
金葉　人知れぬ
ちふはるいとふ名のたちぬべきかな
新勅撰　ふる雪に宿をかぬ
つる春のさとひよ年のこもれく

續後撰　人とゝめぬ
も春のとなりふちのきぶり
新後撰　我身世よりきも果ぬる
ゆきはちりつく春もいそがれやせん
柏玉　河歳暮
年ふる門の老ぬれてるまれ
ときみし年ふ人と寄ぬる
雪玉　家々歳暮
春ぬれば家ゝにさとる数ちゝぬ
はねの中も年を寄ぬる
同　山家歳暮
年ぬるてさ山ふれちのちりの門
はるとなるとなるとふるはし

詞　△年の名残△年の別れ△年の暮れ
△年をとる　暮ひ　△年満△年行年
△歳の末△年の尾△年の終△流れ
年△いぬる年△年の際△年の境
△年の果△年を送る△年を送る△年
を待△年の内△暮△年月流る
。ちづく年。かとみといとく。とれ未物

年のいとき。さとうむつふる年。ぬ。閏ひ
ぬ。ろうくまる。冷くことにさきうぬる
ぬ。歳の暮て一。暦のわく。人無ふ老を
むくふる。とーのかつうぬく。鄭玄つ
りるうぬとー。こんやくもこうるとーは
よもる年波。ぬ年ぬるとーの夜。し
の矢のつよく。とぐるまのこる月日。
○年の尾年の暮の幸くこーく
歳時記拾遺とて本ふ見へうう

連　三ーくまれひうぬ年もうる　行助
ぬーむといまふ三ーぬ　宗長
行人もなくとーこうるれた山ぬ　昌林

能　月年ぬとのこはうとぬ　白雪ぬ
冷のいけるかいはうまとーのうれ　仝
年ままもて眉雑白ーまの雪　嵐雪
ふまるはいくいうるへふほの雪　其角

狂　月もうくこ二日ぬを　支考
行ふや京へとうーんぬ状そう　湖春
いふさよれおきち老とて眉の雪
かーらのまるをくるとーぬ　百廿

十二月ぬーふるうーうーの雪
光法はうるも山ぬーのやし　栗彙
ふのとみおくみ三月ぬ。ふーうくと
たくうきひーもわ車うる　被根

詩　歳暮　羅鄭

・檢酒　・俄驚　・臘月　・逢　カニ臘月ニアフタヤウニオドロク
・匆匆　トレツキガナゼニコノヤウニセハシウタツゾ　・年光　・何事太
・暇功　・初畢　ツユハノウニンモヒ、デリノレワザガスンダ　・三農閑
・萬室　・收成　・歳　・已終　イヘ〳〵ニモノナリヲオサメテトシノヲハリニナツタ
・氷　サツ〳〵トスルサムイ風ガ古木ニヒビクノ　・歷々　・寒風　・號古
・落長松　モノスゴクカニツモツタニキガタカイ一ツカラオチル　・蕭々　・晴雪
・何人　・得　・似山　・翁樂　・榾　・拙無
・烟活　・火紅　ドコノヒトカオレガヤウナ山ズミノオヤチノホタウチ
クベテ火ヲクワツ〳〵トオコシテ
タノシムモノニオヨバフリ

詩 歳暮臺對句 同上

看雪何効醉 傷懷殘臘去
ユキヲミテハナンホヱテモカマワヌ スコシノコツマ冬ハ尽ルコトヲオレフオモフケレド

尋春即有期 屈指早春來
ハルケシキヲ多ツネルコトヲヤ ユビヲ折テミレバツヒハルガクル

詩 同七字對句 詩楚

歳暮陰陽催短景 冬欲半
トシノクレニハ日モ日モ短イヤウニオモフ フユモユカバスキタ

天將霜雪際寒霄 歳又殘
ソラカラシモユキヲクダシサムイヨフニシラセル トシハスコシノコツテアル

歳暮之狀并註 白駒過隙忽逼改

月日ハヒヤウクニマノゴトクモハヤトシムネカヘル

歳誰可脫世紛況於足下
コロニナルタミクトリコムヒフンナルヒトニシテ

公私之忙乎幸偷閑責臨
クヰノトカオイソメシカラウトウシロヒヲミアハセテオイデク

命小酌以遣鬱悶呵々
ダセスコシノサケニ申付テコノウツヲヒラキテヒトウ以上五ツ

歳暮之狀并註 歳華荏苒一年將盡

月日ハヒヤウクニマノゴトクモハヤトシムネカヘル

歳華驚換人皆奔忙
トシヲカラシモユキヲクダシサムイヨフニシラセル

四方況於五子饜紛擾乎
ヨモノカタニハ況テ五人ノ子ニ飽テ紛ラワシ

狂顧舉盃少逐風塵
オイヲクヤタサレカヅキヲフネヲ

草木

此部草木を

冬梅 梅ハ春の物なれど年の内うめ咲をいそりて早梅ハ次ふるべし

哥 六帖 いつれをいつきてとらまし梅の花ぬしもとをにふれる雪

拾遺 おくれゐて梅ハ咲ぬるはるハ我身のりんとなるべし 貫之

千載 雨もこの垣ねの梅ハほころぶるかいうりこそとけるも白うめ

連 みさくやいとくろ枝梅の香専順

俳 賀根おろく終湯丸立やその梅こ文考

早咲梅

△早梅△寒梅いづれも早く咲たる梅をいふ

早梅ハ十月前冬至前ニ花開くこと梅譜ニ出ス△寒梅ハ香ヨ〳〵九月花開くこと花譜ニ出寒梅ハ十月の季ヲ出し〳〵る俳書も多くは俳ハ十月の梅ハ〳〵り咲ともいふ也べしいづれも十二月ヲ〳〵可ヲ〳〵んか

哥 柏玉

後柏原院

ら〳〵〳〵もあやふくみれやみの日ぬ
あ〳〵しかはきの物のうめ花

連 雪ふのこゑせてやん物の花 宗祇
梅ハ月ハ雪あとにかさしうる 肖柏

俳 早咲や徐一番ふ物の花 支考
早梅や御宮の里ハ雲ゐ哉 蕪村

詩 寒梅

戎昱

一樹寒梅白玉條 一本ノカヒバイガ
ヤウニミゴトナ
迥臨村野傍
溪橋 村ヤ野ニサレカヽリテ根モトハタニガハノハレニソフテアル

不知近水花先發 水ギハニ近フスヽノハヤクサイタノ
疑是經春雪未消 ヨシラスニ
春ヲヘテモキハヌ玉ノ
ユキノ殘ツクカトオモフ

臘梅

常の梅の花ふ花ハ〳〵
花の形狗蠅ニ似たり
故ニ別名狗蠅梅ともいふ色黃
香甚し 故ニ擅香梅ともいふ
又色によりて淡黃梅ともいふ
本朝ハ後水尾帝の
御宇ニ始く朝鞋より貢ス
○梅ニ似く梅ニあらぬと活法ニ出

詩 臘梅詞

輕盈半度縷金囊不似西施粉態粧
ガタノハナデキンシテクンタフクロノヤウナニヨウテ西施トイフ美人ノケハヒタテタスザタヨリハヨイ
爲是來從眞蠟國
幾人爭號小黃香ハナ

ハモトヨリ蠟国トイフトホヒクニカラ来タハナジヤニヨツテオホクノヒトガワレイチトシヤウヒシテ小貴香トイフ名ヲツケタ

詩　五字對句

同上

花裏重々葉
不施千点白
オビタヽシフシロイハナハサカヲドモ

枝頭點々春
別作一家春
ハナノナカニオホクノ葉モミエル
エダノサキニチラヽトハルゲシキガミエル
冬ノ末ニワシヒトリノ春ヲミセル

探梅　冬の末ふ梅をたづねつくなり

俳　春を探る梅ふ新年ふ入る初花ふ蕊

寒竹子　孟宗竹。薩州ふ生ずる竹冬筍生じ小さくして味美なり。鳳尾竹と云へる竹も冬筍生ずれども細くして喰ふべからず三才図会ニ出

○冬の筍ハ孟宗と名づくる事ハ唐土呉の国に孟宗といへる者あり孝あり母好む夏雪の中ふ竹の林ふ行しふ忽ち孝心を感じて冬ごもりの筍生じ出る則取て母ふ供ずとかゝるサ四孝ノ中ニ出

今ハ竹ノ根ふ蠶を置春ふ筍を出

俳　孟宗冬枕のこゝろ　竹ノ花ハ春風ふ吹

生類

此部ふハ十二月ヨリ月の生類をいふ

八目鰻取

北国ふおゐて殊ふ諏訪の海の厚氷ふ下ふ穴をあけて其穴ふ氷を破り取なり

妙薬　小児の疳又ハ眼目を煩ハ春夏ふ多くしハ悪し寒ふ取るハ奇功あり焙て食ふ好し

俳　八目鰻阮逸の水経の富　由山

寒鯉取

箕輪田鯉取。常州ミのゝ国ハ水の流を隔て江ふ近き湖ふ連れ依て魚の味美

俳　鯉ふ乗る勢ふ乗る　むつ吐千林

鷦巣　雞乳　もけハ口の二ツ三ツ

必用

此部ハ十二月丁月の要用の事を記す

破軍向方

夜九ツ 卯ノ方	夜八ツ 辰ノ方	夜七ツ 巳ノ方	
朝六ツ 午ノ方	朝五ツ 未ノ方	朝四ツ 申ノ方	
昼九ツ 酉ノ方	昼八ツ 戌ノ方	昼七ツ 亥ノ方	
暮六ツ 子ノ方	夜五ツ 丑ノ方	夜四ツ 寅ノ方	

日刻

○子日廿日○子ノ刻廿ノ刻　事をなすに用ゆべし

方角

此月家普請他行西の方角ロトリコミアシ　〔吉〕天道西ハ行くべからず

樂事

此月ハ四時の未だいまだ得る折なれバ物少くきぬぐりなどうちもらくをぎ皆春待心よりの祝ひなどおかく或ハ物庭園ハ梅開くわしと聞くハ

策ハ新算くりてへ行ハ即畫中の人ハ似ゝり甚雅趣ハ

はうるし夫茶室炉辺の興尚閑人の時を得ゝうとゝ

衣服式

枯色。梅五節　女紅同單

白き上着　椿衣　面藤芳　裏赤　櫻　五節季より後

ハ用る事も有　腈燭色衣　ぬき紅　たて紫

生花式正

寒梅　水仙　寒菊　寒牡丹　寒百合

天氣占候

此月紫の雲たてバ大風ゝり赤雲ハ

ゝさハひあり。戌亥の雲ハ風を生ず東

○此月ハ雨のぬち風を生ず東

南のうぜハ久〳〵吹ず。虹あ

きバ人民わゞら〳〵虹ひくゝ

きバ大豆のゝゝ高〳〵来も高し

○霧のきバ来年五穀〳〵来年

冷る霧多々れば来年旱ふく
稲悪―○上中旬雪ふれば来年
梅雨中雨ふる○寒中ふ雷ひのまこば
米の價高―又来年秋洪水あるべし

養生

孫真人曰此月ハ甘きを減し苦きを増し心を
補ひ脉をふとくし腎を調理とべし
○寒中に天門冬を茯苓細末して
酒又ハ水にて服こべし多く用
れば薄者ふとく能く寒を忘のぐ
右の外養生の法委く延寿養生
論に出ふり大に益ありて見るべし

屠蘇方

白朮　桂心各三分　防風一分
茱萸　巴戟　蜀椒　桔梗各五分
大黄　烏頭　赤小豆十粒
右の薬を三角の紅の袋に入除夜の井の底
ふかけて元日に取出し酒にひたして呑べし
○時珍の白蘇ハ魅気の名此薬一切の
鬼疫を屠割する故ふ名づくとぞ
右の外包中本式薬方諸医の論
悉く丸散手引草ふ委しく見るべし
○長生仙様傳といふ本ハ平々小本
一冊ふ人間長寿を得の法妙薬
秘傳ものの尽小児誕生ふうそぶ祝
産前産後心得土ふ生る子ハ短
命なりといへ共長寿せしむる術
其外一生の間養生のこころとのの

飲食

此部ふハ人かみて緊し
ふる食物を上あげむ

鯛味噌

生鯛の腸骨を去て
身ばかりふ味噌ふ和し
よきうぐんふ煮爛し泥のごとく
(能)細味にやはらかなる故ふ人 兒十

煮凝

何魚にても油ふる魚を煮
て一夜越れば煮汁氷る

凝豆腐

○氷をとる菊酒○氷餅
てひやばもらの餅とする
(能)こんぶ山人て必ふり　秋光

(狂)あの二の丸は清る日なれども水解
なぬうちはいそがしいもちひん　隆峯

寒曝　餅米を蒸まして(俳)寒晒
あげて仕ふなの内　其角

寒餅　寒中に製する餅ふかび
出る事なく味も美し

(狂)主の隠居とみるもわうくと
乳のもちゆくてうびぬつき合　左方

寒造酒　(俳)酒蒸や雛ふるみぬ
主造酒　白面

(狂)うつらうつらほいはつてうきつてう
これを煮まれはうう有る　松雨

薬喰　鳥獣の肉其外陽物に
食して寒をふせぐなり

(俳)美人ひ且好合点の和面い　野水
寒ひ新めきくひもちゐれ　李右

鹿賣　此頃事ら鹿の肉を煮て
青と冬に肉を喰へば内を補

い気をうーー血脈を通して大ふ益有
(俳)鹿賣や踏とけて行くもの市変矢

十二月飲食　並料理献立

禁　獐肉　猪肉　霜ふ燗
物　きうり菜　菜と食ふ事な

○牛肉と食へば多く食ふべし
○牛肉と食への神と破る

好物　羊頭　今月食ふべし　他
月々に病と生ぞ

料理

汁　たつくり　隆ろう
よりかう　丸むしうどん

けしの実　たら
木の芽　茶せん茹ぎ
うくりぐん

むかびせう
つぶたつけ　ごまあへ　ごまあへ
麦菜　うぬく
かぶらて　ごまあへ

清汁　長いも
こさせう　がん
さんせん粉

鴨　生あひる
水でんの

膾　鯛・赤ふ
たんう・ケ
ぜうが

多具　まづう
ほうくごうぐう
むかげ　ごうぐう
大こん　そうぬ

鮫・くつげ
樽・たらん・うど
ちんうんぐいど

さより・塩引さけ
大こん・うど
ぶどう

生あわび・せん
そうげ・大こん
花かつを

差味

生鯛 角切
生かつを
おろし[illegible]

こい
皮さけ

ふな 作り身
くわゐ・かん
みつば・あさぜ

きすご・そうげ
ごぼう 白みそ
ひさご・わさび

にし 白さ 精進切
たんざく大こん
すりわさび なんぞなぞ

焼身さいの
つくし
その葉し 焼

煮物

にりの

きんこ・きり身
かもの・かわ木茸
むすび

鴨
ろろる
ひらん

たいらんぶし
くわゐ
松茸

ちちたけ加せんが
細し
花え

白うお 中くさ
くずあん
わさび

一塩鮭
まのて
せんがう

生鯛 あし
わさび

和會物

生がい 角切
わさびみそ

串貝
うど
あへ

烏賊

かうさけ
まあく

生あわび
まるうげ
まえて

そうげ
ちゃうろぎ
まえをそ

ろるまえび
やうぶうけ

赤にし
ふうぶ
まえそ

吸物

かき
せり

生海鼠子
うきのとう

かしき
ごぼう きざみ
せうが

鴨
せり
えんせう

かさご
つみ意
こしよう

汁

精進

むとびかん瓢
つぶしぬたけ
まのり

あげさん田やく
れろしなえ

くずし とうふ
きくらげ こんにゃく
せり

さくひ どうふ
ぎんなん
まのり うけ

はぶ椎たけ
そうぶえ

さいどうぬ
皮さけ
ころやきけ

ときく
からし

清汁

たうぬ
うしほ
わさび

小松ばし
彩りえ
こせう

膾

ちこん・まあさけ
そうり・きうりう
きんかん

はうくし
あげどうふへ
うど・ぶう
せうう

差味

ちこん 小口切
あげふ
皮さけ

あげふ・ゆで
本そうけ・皆
くう・すんかそ

さつまいも ちん
かぶ ちらん
ひようろ わさび
いり酒

むしいも
さくうけ・川らさ
わさび
いり酒
たんぽ

ちね(?)ふけそまちかん
氷こんにゃく
ぶんどうの
せうが

三輪そうめん
皮さけ・わさび
いり酒

煮物

和會物

時物

鳥

魚

青物